

## 「熊楠と紀州的自然観 東北的自然観との比較を みつめて」

著者	荒俣 宏
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究 Vol.8 別冊
号	8
ページ	39-53
発行年	2014-03-25
URL	<a href="http://doi.org/10.34428/00007491">http://doi.org/10.34428/00007491</a>

## 熊楠と紀州的自然観 ―東北的自然観との比較をみつめて

荒俣 宏（博物学者）

皆さんこんにちは、荒俣でございます。ご案内をいただいてから、今回のテーマを考えれば考えるほど、単に自然観を論じるだけでは埒があかないという結論に達したので、あらかじめ提出してありました講演のタイトル「自然」に加えて、「靈魂」という言葉を追加していただくことにしました。靈魂という話題をここにくわえないと、今日的な神と自然の話につながらないような気がしたからです。

テーマはさらにふくらんで、東北と熊野と、ついでにドイツのお話しも入ってしまいました。これだけ入ったものですから、50分で話せるかどうかまったく自信がないのですが、とりあえず全力を挙げてお話していきたいと思います。

これから取り上げたいのは、紀州田辺代表の熊楠と、東北は岩手代表の宮沢賢治の二人です。ついでにドイツ代表はエルンスト・ヘッケルという、いずれもエコロジーに関係のある人々です。ヘッケルは ecology という言葉を広めた人です。熊楠は、それを日本で最初に受け入れた 1 人であります。宮沢賢治は東北で農政の仕事を生懸命やりながら、ヘッケルやらアインシュタインやらの西洋の新科学にも関心をもち、特に心霊現象に自説を発展させながら自然と神を見つめた人でありました。もしこの 3 人に共通点があるとしたら、何かわれわれの参考になるのではないかと思います。今日はこの 3 人の共通点と、少し違いはありますが大きな意味での共通意識をお話ししていきます。

私は 3.11 大災害の後、岩手県の復興対策の文化的なアイデアを出す 1 人として、岩手県知事と何度か話をしたことがあります。そのとき、この岩手が南方熊楠のいる紀州とどこか親近感があるという感じがしたのを覚えています。地の果てのようなところでありながら、非常に教養の深い人たちがいて、新たな地域文化を掘り起こし、世界に発信したという経緯は、どちらもよく似ております。なぜそんなことができたのか、非常に大きな疑問として提案させていただきました。

当初、簡単に考えたのは、実はどちらも地の果てと言われていますが、文化的には非常に往来・交流の激しい「文化的な交点」であるという歴史・地理的な共通点でした。紀州は本州南部に位置する和歌山の一地方でありましたが、かつてはとてもハイレベルな文化がありました。熊野信仰もそうですが、海上には船という名前の高速交通機関が定期運航し、海路という名前の高速道路が通る幹線が設置されていました。東海道新幹線が走っていたのと同じような場所でありました。

東北の岩手も柳田國男の書いた『遠野物語』などの場所を訪ねてみますと、確かに山人がいる奥深いところではあるのですが、実はあそこに流れている川を中心に物資が集約され、地元の産品を江戸・大坂に供給する交易の拠点であり、文化の交流点でもありました。だからこそ、明治になって佐々木喜善のように民俗学やスピリチュアリズムなど欧米の新しい思潮を取り込める文化人が現われたのでしょう。つまり田舎の中の大都会であり、大文化地だったと分かったのです。そのような共通点も

ありながら、やはり言えるのは、ヘッケルも熊楠も宮沢賢治もだいたい生まれたときの世界情勢が彼らをそうした新思潮に近づけさせたのだろう、ということです。いわば、3人は時代のシンボルだったわけです。

大きな括りで言いますけれど、ちょうどこの3人が生まれた、あるいは活躍した時代は、世界的にデッドエンドというかデッドロックに乗り上げた閉塞の時代でありました。物質的にも政治的にも、また科学的にも、ちょうど行き詰りにぶつかってしまった時代だったのです。今とも少し似ています。にっちもさっちもいかない。根源的な哲学問題が非常に困ったことになったのだと思います。

いったいどれくらい哲学的に困ったのかということを、例を挙げながらお話しをします。まず一番大きかった問題は、西洋の屋台骨だったキリスト教の権威喪失です。ちょうどこの時代、19世紀にかけて、西洋では神が死んでしまいました。安心のバックボーンを支えていたキリスト教的な意味での神が、死んでしまいました。

なぜ死んだかという、誰も神を信仰しなくなったこともあります。どうも神が役割を何も果たしていないということ、これが分かるようになりました。神が仕事をしていないのなら、神は死んだことになります。神の役割というのは、つまり「超自然的な力」を発揮することです。ちょうど西洋の近代思想が盛り上がってきて、だんだん神様の超自然的な力が必要なくなってきたのです。宇宙は神様がいなくても運行いたします。地球は神様がいなくても回転を繰り返します。毎日が次々に去っていく。これらは神のコントロールを必要とせずに動いているのです。

だから、人間は神に遠慮することなく、コントロールする者がいなくなった自然に割り込んで、それを自分たちに具合がいいように使用できる。自然を機会と考えるわけですね。機械論的宇宙観などと言いますが、どうせこの世の中は神がいなくなって勝手に動いている機械なのだから、人間の役に立つように使えばいい。神は役に立たなくなっただけではなく、そのうち神の本質とはいったい何なのかという身元調べまでするようになってきます。神についての叡智が、多くは妄想か仮説に由来するという話が、だんだん力を得てくるのです。

とうとう哲学の上からも、実際には何の役にも立たない神は死んでしまったという宣言を下されるようになりました。これは西洋の人間ではないわれわれから見ると、どうでもいいことかもしれませんが、キリスト教の社会では大変な騒動になりました。それまでの大前提が覆ったわけです。

つづいて槍玉に上がったのが、私たち人間が有する叡智、すなわち知力でした。これについては、すでにフランシス・ベーコンらが「知は無限に発展する」というテーゼを出していましたが、19世紀末になると、これも信頼が置けなくなりました。もっとも重要だったのが、叡智の限界、知力の限界というアイデアです。私たち人間が永遠に知ることにはできない「謎」が宇宙には七つあるとして、デュ・ボワ＝レイモンという生理学者が『自然認識の限界について』および『宇宙の七つの謎』という問いかけを発表しました。

私たちの自然認識では到底測り知れない宇宙の七つの謎とは、以下の通りです。

1. 物質と力の本性
2. 運動の起源
3. 生命の起源
4. 自然の合目的的性質・効率的性質
5. 単純な感覚的性質の起源・意識の起源
6. 理性の起源、言語の起源
7. 自由意志

今後の科学発展によっては解決可能な謎もありますが、おおむね人知では知ることの出来なような問題ばかりです。

しかし、話はまだつづきます。次がさらに情けないのですが、ちょうど 19 世紀末になるにしたがって、この世は「目的がない」ということがわかったのです。神がいた段階で神に近付こう、あるいは自分自身を向上させようという、生物で言えば進化論的なものは、時間が経てば経つほど生物が理想の姿に近付くものと考えられていました。卑近な例で言えば、私たちの暮らしはどんどん良くなり、どんどん天国が近付くのだという安心感があったのです。これは科学的 세계観も後押しをしていました。

しかし、そのうちに本当に機械論的な世界観が地球を支配してしまうと、極端な話、私たちは偶然の産物であり、偶然から生まれ、偶然が重なって今のようになっている、という発想になります。神が操る超自然的な力など、存在する余地もなくなります。先ほども言いましたように神は死んでいるわけですから、この世の運行は神がコントロールするわけでもない。目的があったわけではない。まったく無目的で、どうなるか分からない日々を危うく暮らしているという発想が出てまいりました。機械論的宇宙観が生み出した闇の側面だと思うのです。

そしてもう一つ、これがさらに重要なのですが、キリスト教が約束していた神による救済も、もはや期待できなくなりました。多くの宗教では神こそが人間を何とか救い天国へ引っ張り上げてくれる安心な存在でした。ですが、神は死に、神は役に立たず、そして目的も何もないとなれば、人間は、最後にどこで救いを求めればいいのかのでしょうか。日本でも、最後は弥勒菩薩が来て浄土に迎えてくれるなどの安心があったわけです。だから、みんな神々を大切にしていたのですが、機械論的宇宙観の展開と神の死によって、そのような救済が望めなくなっていました。

そこで 19 世紀の知性は、神に代わる新たな「救済の主体」を発見することに全力を傾けました。そこで登場するのが、ふたたび、「自然」だったのです。母なる大自然には回復力と治癒力がある。自然は、文明の害毒を中和する薬である、と。特にドイツ・ロマン主義は、自然に霊性をも認め、神と同じ力を与えました。自分たちの体と精神を守る最後の砦は自然であり、頼れるところはそこだけだろうと、考えるようになりました。

その発想を具体的に展開したものが、19 世紀の新しいコンセプトといえる「エコロジー」の思想で

す。ちょうど世紀が変わる 1800 年頃、ドイツにアレクザンダー・フォン・フンボルトという自然地理学者が登場し、地球の自然環境を総合的に調査し、地球の生命は自然環境の変化に応じて変化している事実を掴みました。そしてその自然環境は生命科学の基礎であると同時に、美学や倫理をも支配していると説いたのです。

1850 年ごろにはアメリカで「超絶主義」を柱にした自然を友とする質素で敬虔な暮らしが目指されるようになります。ヘンリー・ソローは自身の生活体験を『ウォールデン 森の生活』に綴り、影響を与えました。ソローは地球の環境を維持するために「健康と持続可能性のある暮らし Lifestyle of Health and Sustainability」という考え方を提唱しました。この言葉の頭文字をとって「ロハス LoHaS」といいます。

そして 1866 年に、ドイツのエルンスト・ヘッケルが進化論者の立場から「動物は無機物と有機物の両方の環境にかかわりをもち、とりわけ動物と植物の友好な関係を含む」と発言、そのような自然環境の関係性を「エコロジー」と表現しました。つまり、自然は自立した原理により整然とした調和ある世界を維持しているということです。ヘッケルはこの関係が最もよく現われている環境として植物の生活場を示しました。植物は支え合いの相互関係を築き生態系としての森林を形成しているということです。自然は機械ではなく、そこに存在する有機・無機両方が相互に支え合う「生命」に似たシステムを持っている、と。

これにつづき、1877 年には同じくドイツのカール・メビウスが動物の相互関係が見られる環境として海洋を選び、食物連鎖のシステムを発見しました。すると今度はエドアルト・ジュースという博物学者が出て、地質学の立場から、無機的な岩石と大気層との間に生物が「生命圏ビオスフェア」と呼ぶべき環境を創造していることを発表しました。これは極めて重要な発見で、地球自体が生命の生産物であるという発想の源になりました。

それでは、生命が作り上げた地球の環境とはなんでしょう。

いうまでもなく、大気、岩石、気象、環境など、すべてです。地球に生命が誕生して約 38 億年。その当時の地球は、たとえば大気には酸素がほとんど含まれておりませんでした。そんなとき、藻類が最初の生命として誕生します。あるとき、藻類のあいだからシアノバクテリア（藍藻）というのが誕生して、光合成ということをはじめた。これで、大気に酸素が蓄えられるようになったのです。植物が持っている葉緑素も、このエネルギー生産型の藻類が取り込まれて共生しているにすぎません。我々の細胞のなかにいるミトコンドリアも、元は食べた藻類が共生しはじめたものらしいのです。こうしてエネルギーを産む「エンジン」を獲得した生物は、そのエネルギーをもらって動き回れる生き物となり、複雑な多細胞生物への道を歩き出したのです。

さらに藻類は酸素を出して地球の空気の組成を変えてしまいます。いま、太陽系でこんなに酸素の割合が高いのは地球だけです。藻類はそのパワーで岩石もうみだします。石灰岩なんて、藻類が作ったようなものです。酸素と結合しやすい鉄も、藻類のおかげで鉱石としての鉄になり、これが海の底

に沈殿すると、核ができてマグマを冷やす。ついでに、石油も藻類がつくりました。今の燃料資源はシアノバクテリアのような藻類によってつくりあげられたといえるでしょう。石油だって藻類がつくったものなのです。

しかし、この自然がまた、19世紀の終わりごろになると、私たちが期待したような救い手ではなくなってしまいます。なぜなら、自然あるいは地球にも人類を守る上で限界があることが明らかになるからです。それを端的にしめたのが、二つの世界大戦と文明による環境破壊でした。

それから、大都会という文明環境についても考えなければなりません。それまでの大都会は、人間の暮らしがどんどん向上するという目的や理想があった都市でありました。現実としては、貧民層ができたり、工場の周りでは公害問題が出てきたりしましたけれども、方向的に大都会は新しい人間の文明の一つのスペースである。ここにいれば、ずっといい暮らしができるというものでした。

19世紀、この大都会に大変な危機が迫りました。食糧問題などいろいろありますが、一番大きかったのは、どんな人も隣に暮らすだけで命がおびやかされる現象が出てきたことでしょう。もちろん、治安が悪いので、人々が自分で命を守らなければいけないという精神的な荒廃の問題もありますが、もっと大きなものはパンデミックといいますか、世界的に流行する病気でした。この200年ぐらいの間に、新種の病気がどんどん現れてきたわけです。たぶん昔からあったのでしょうけれども、この200年ぐらいの間に目立ってきたのです。

一番大きかった最初のパンチは、コレラでした。それまでのたとえばペストをはじめとする伝染病は、水が悪かったり栄養が乏しかったり、生活の場が不潔であったり、要するに貧しさが生む環境の下で流行しました。極端に言えば、貧乏人ほど危険にさらされる。一方、大金を持っていたり、環境の良い場所に住んでいたりする富裕層や貴族層は、その病気から逃れる可能性に恵まれていました。

ところがコレラは空気感染です。富裕な人、知恵のある人、貴族、名誉や地位を持っている人、そういうこととは一切関係なく、都会に住んでいるというだけで私たちの命を見境なくむしばむ、大変恐ろしい病気になります。まず、空気を吸わないわけにはいきませんから。

さらにもう一つ大きかったのはインフルエンザの大流行で、何百万人死んだか分かりません。戦争よりもたくさんの人が死んでいるのです。これも空気感染で拡大しますと、防ぎようがありません。都会に住んでいること自体が、危険となる。都会とは理性が創りだした生活圏だとすれば、その理性を上回るような災害が都会にも浸食していきました。

20世紀になると、ほとんどの大都会は計画的な改良運動を行います。一番大きかったのは下水道処理などで、衛生都市にしようとしたんです。公衆衛生をしっかりとしようという大きな目標にしたのですけれども、それでも今われわれが直面しているように鳥インフルエンザなどはあっという間に恐ろしいことになってしまいます。

おまけに、最近特にそうですが、自然が同じように予想もつかない暴れ方をするようになってしまいます。今まで自然というのは、ときどき暴れるけれどもわれわれをバックアップしてくれる最後の

よりどころ、救済の源でありましたが、もはや救済の状態とは言えない、不制御のほうが大きな比率になってくる状態になってきました。

それから、最後にもう 1 つ重要なのは、人間には自由意志がないということです。ちょうどこの 18~19 世紀ぐらいから浸透するようになりました。私たち人間には自由に行動する力がありません。もしわれわれが自由意志を持っているとすると、例えばすごい犯罪を起こしたり、一つの大都市でテロを発生させたりするようなことは、神が命じてやらせているように見えてしまいます。特にここに出てきた 3 人のうち、エルンスト・ヘッケルはそう考えます。

「自由意志が存在すること自体がわれわれにとっては救済にはならない。むしろ自由意志がないことが救済になる」という、逆転した救済のプログラムを彼は出すのです。この世の中、私たちに自由意志は存在しないということ、これらを総合すると、もうにっちもさっちもいかないのです。

実は、この東洋大学の創立者である井上円了もそういう時代に生まれ合わせ、魂の危機を救おうとした 1 人でした。今まで宗教というものは、かなり安心の救済であったわけですが、宗教がだんだん妙な話になって、迷信や祈祷など実際には効力のない慣習を中心とした文化になってしまった。では、名前を変え、これからは「哲学」と呼ぶことにし、哲学の思考によって今出てきたような問題をもう一度コントロールする力、救済の力を考え直そうとします。だから哲学は最高の学問であり、この学問を深化することによって、今の状況を打開しようということで、円了は東大哲学科に入り、やがて東洋大学の全身である「哲学館」を創設するわけです。

さてここで、今日取り上げる 3 人、熊楠・ヘッケル・賢治の登場理由ですが、この 3 人は当時の危機において、それぞれの思考を極端な形で飛躍点に用いたパイオニアだったと思うのです。先ほども言いましたように、人類に最終的に残された安心安寧の基礎、すなわち自然を、従来の情緒的な自然や理学的な自然を乗り越えた「超自然」として再定義することに生涯を掛けたと言っていいと思います。なぜなら、この 3 人は神や靈魂の問題も自然の概念に含めた新しい自然思想を打ち出して、私たちに新しい救済をもたらそうとしたからです。

ちょうど世紀末にこれから新しい救済や哲学、思想、文化をつくろうと動き出した人々に対して、水を浴びせかけるかのように、同じ科学者の中から一つの大きな挑戦がありました。先ほど紹介したデュ・ボワ＝レイモンです。デュ・ボワ＝レイモンは、静電気、生体電流の研究者です。われわれの生体の中で電気が発生する、昔ガルバーニという人がカエルの筋肉に電気を流すと、カエルの脚が動いた。人間の生理以外にも電気のようなエネルギーが生物のいろいろな器官を動かすことができることを実験で証明しようとした「動物電気」派の後継者であります。

彼はそういう生理問題の研究をしながらも、どうしても考えなければいけない科学上の問題があることを世に知らしめなければならない、と思いつきました。それが、不可知論であり、もっというならば「科学で宇宙の謎はすべて解くことができない」という主張です。じつは、ヘッケルをはじめ、

熊楠も賢治も、科学を有効な地の作業としながらも、それだけでは自然を救済の主役にするためには不十分であることを認識していました。ヘッケルは純粋に冷たい唯物・機械論を突き詰めて魂に物質的基礎を与えようとしてしまし、熊楠は大乘の思想によって世界を「縁起」の中に関係づけようとし、賢治は農業と芸術の実践を通じて宇宙的な魂と交歓することを願いました。いずれも、死という俗世的宿命から人間の本質部分すなわち魂を宇宙的意味において救い出す作業でした。

その前提として、デュ・ボワ＝レイモンの「知の壁」問題があったのです。デュ・ボワ＝レイモンは1880年ごろ、ある学会において科学者や哲学者の前で挑戦をしました。知識を磨いて、分からないことはいつかわれわれの理性で分かるようになる。今まで超えられなかった道も、いずれは超えられるようになる……というような楽観的な共通認識は誤りである。私たちは知らないのだ、これから何も分からない、ということをおる講演会で言いました。

これにどう答えるかが知の世界で大変な問題になり、回りまわって日本にも影響を及ぼしたのです。円了さんも、おそらくこれに答えようとしたのでしょう。だからこそ、妖怪らを中心とする迷信を宗教から取り除き、精神科学や哲学の周りもきれいにし、本当に役に立つ、あるいは最高の学問としての哲学を磨き上げようとしたのです。

ところで、デュ・ボワ＝レイモンが提示した解決不能の「宇宙の七つの謎」ですが、もうすこし中身に踏み込みます。

七つの謎の1番目は、物質と力の本性にかかわるものです。物質や力の本質は一体どこまでわかるのか。この質問は、多くの人の彼の意見によれば、解決不能です。そもそも物質がなぜ存在するのか分かりません。今はビッグバンとかいろいろなことが言われていますけれども、本当に証拠を得られるような解決は当時では考えつかなかったでしょう。それから2番目に、運動の起源。物質には運動の法則、保存の法則など、いろいろな法則がありますが、なぜわれわれは動いているのか。物質は動いているのか。その動きの源エネルギーについても解決しないであろう、と。

3番目は生命の起源。彼は生理学者ですから、これはやがて解決されるかもしれないと言いますが、しかしまったく困難な研究になるでしょう。それから次が、自然の合目的性。なぜわれわれは今知能を持っているのか。これは神の設計にあるものなのか。神は死んだとはいえ、どうもわれわれは進歩しているらしい。進歩は目的になるのではないか。もし、そういう目的が存在するのだとしたら、なぜ神がコントロールしていないのに、われわれがいい方向へ向かっていると言えるのだろうか。この答えを出しなさい、と。でも、この答えが出せることはないでしょう。そして、感覚や意識の起源。われわれはなぜ意識を持ったのでしょうか。その理由が分かりますか。心理学のようですね。6番は理性の起源。われわれの理性と言語の起源。理性や言語はなんとなくわかりやすいような気がしますが、当時はそれらも分からなかったのです。7番は、先ほど言いましたように自由意志。神がコントロールしているはず、あるいは機械的な宇宙がコントロールしているはずのわれわれが、自由にボラ



ンティアでやりたいことができるとしたら、自由意志が存在しうることになります。しかし、それも難しすぎる。

まとめると、物質と意識の起源の問題なのです。物質はなぜあるのか、意識はなぜあるのか。もっと言うと、考えること、言葉は一体いつできたのかという問いが答えられないのですが、人間にとって全部自分自身のことなのです。意識の問題にしても、意識が意識を分析することはなかなかできません。不可能だろうと思います。

こういう問題を突き付けられたときに、3人は三様の挑戦を試みました。

まずエルンスト・ヘッケル。この人が思想的には一番パワフルな人だったと思います。ヘッケルが行ったことは、井上円了風に言えば、科学上のあらゆる迷信は吹き飛ばすことでした。そのうち最大の迷信というか科学的妄想は、生命は不死になりうる、という認識です。死なない生命もいるかもしれない、霊魂ならば不死である、という妄想です。ヘッケルはその迷信を世界から吹き飛ばそうとしました。

純粋な唯物・機械論の立場から言うと、この世の現象は偶然と流転によって生起するもので、自由意志などは存在しない。七つの謎に対して、彼は生物学的に答えます。たとえば生命の起源、われわれが合目的的に進化を遂げた理由を、彼はダーウィン進化論で解決できるのではないかという切り札を持っていました。エルンスト・ヘッケルは『宇宙の謎』という本を書いて、今まで出てきたような人間が分からないと言っていることも分かるのだという未来像を明らかにしようとしていました。

一方、ヘッケル思想にも精通したらしい熊楠も、自然の非論理的な構造を理解する切り札をもっていました。それが、東洋の哲学や宗教教義です。彼がよりどころにしようとしたのは真言密教の教えでした。彼がよく言っていたのは、原因があつて結果があるというような、理性で考えることのできる原因、結果の世界だけで自然は理解できない、という認識です。世の中には不条理というものがあつて、まったく理屈に合わないことが現実には起きている。それをどうやって解決するか。

彼が東洋人として誇りに思つたのは、仏教には因縁の思想があることでした。これに対し西洋は因果の思想です。因縁と因果とは、発想が異なります。因は因果律のことだけれども、縁は論理的には証明できない新しい律である。もう少し分かりやすく言えば、偶然や、まったく何の関係のないものがいきなり関連して起きることがあり、その法則が必ず存在するはずである、ということです。さらに、ここからおそらく南方マンダラのような熊楠的世界観が、だんだんふくらんでいくのです。

そのマンダラの新しい世界観は、因果・偶然、そして可知・不可知、縁・無縁といった関係が検討できるようになりました。論理的関係を越えて、縁でつながる関係もある。これは因果律を超える方法です。

宮沢賢治も、東北で同じような啓示を受けています。彼は農政家ですから、東北の地震といったいろいろな災害に対する防御をどうするかということに、大変心を砕きました。宮沢賢治は生まれたときに三陸沖の地震があり、亡くなった年に三陸の津波があつたのです。生まれたときと亡くなったと

きに、東北を震撼させる 3.11 のような大災害がありました。その間に生きた人です。

彼は、ふつうの唯物論ではだめだという想いを抱いていました。唯物論とは要するに人間が感覚を持って外界と接することを中心に考える思考ですが、人間が感覚でとらえられない世界はいくらでもあり、唯物論的な理詰めで理解することができないものも多数存在いたします。

賢治にとって 2 番目に重要なのが、そのような唯物論的感覚で理解できない異空間の創造です。異空間に関する手がかりや資料を何とか見つけたい、彼の目標はそうでした。そこで彼は田中智学の法華思想に関心を向け、西洋で勃興したスピリチュアリズム（霊界の実験研究）、また科学と芸術にも同時にアプローチしました。

すると 3 人は存在の危機を見据えながら、生死の双方を包含した上でそれを超越する方法に心を向けました。生きるか死ぬかの問題、重要ですが、それを認め両立させる道はないのか、あるいは死をどうやって乗り越えるのか。熊楠が発見したヒントの一つが粘菌です。粘菌は変形体というアメーバ状態と、キノコのようになる子実体との間に、生きた細胞と死んだ細胞が共存している時期があります。粘菌は死の世界と生の世界を行ったり来たりしているかのようなのです。

じっさい変形菌の一生を見てみると、奇妙な時期があるのです。たとえば真菌と呼ばれる核の状態にある菌は、環境が悪くなると死んでいるのか生きているのか分からない仮眠状態になってしまうのです。しかも固い皮をかぶって、ふつうに見られるぐちゃぐちゃしたアメーバ状態とはまったく違う形になります。

死んでいる状態、仮死の状態、動き回っている動物の状態、植物の状態、熊楠の言うところによると、生きている状態と死んでいる状態でも、このような変異が見られます。生死とはじつは実体の変遷過程の一状態同士ともいえるので、乗り切りが困難な障害でもないと考え始めます。これは新しい救済の一形式だと、私は思います。

他方ヘッケルは、自然とは巨視的に見て一個の大規模な有機体である、という発想にたどり着きます。これがエコロジー思想の原点です。有機体がすごいのは、どこか一部が死んでもそれを補うことができることにあります。あるいは子孫を残して存在を安定させる力があります。が、その一方で、どこかが死ぬと全部死ぬ可能性もあります。卵もそうです。一部を切っても、卵としてはちゃんと出てきます。ウニの実験などをすると、ウニの一部を切り取っても、またちゃんと全体が戻ってきます。

生命体は、死んだものと死んでいないもの双方に何かコントロールを与える力があるのではないか。神がコントロールしているわけではなく、生命体そのものにその力が内在するのであれば、われわれ生命体には死を乗り越える潜在力を期待してよいのではないか。生命体であるわれわれは、最終的には自分自身が救済の源となるのではないかという発想を、彼は持つようになります。つまりわれわれという存在は、みんなつながっている。どこかが欠けても、どこかで残る、そういう存在なのではないかと考えるようになりました。従って彼の結論は、生命を一本の流れ（現象あるいは事態）であるということになります。

宮沢賢治も、同じようなことを言っています。彼の有名な『春と修羅』という詩集の冒頭に出てくる言葉です。「わたくしといふ現象は仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明です」。すごいですよね。有機交流の生命体だということです。しかも彼は有機交流の電燈である一つの青い照明、個々の1人1人は電流から明滅する青い光なのである、と言っているのです。

実は、熊楠もヘッケルと同じようなことを言っています。ヘッケルが、生命は全体の流れであると言ったときに、「これは存在というよりも現象である」と表現しました、熊楠的に言えば、それは「こと（事）」です。

宮沢賢治も同じことを「わたくしといふ現象」と言っています。最後に「ひかりはたもち、その電燈は失はれ」るとも、語っています。電燈を肉体だと思ってください。その電燈は光らなくなるけれども、光のもとである光子、光はそのまま保たれる。今風に言えば、肉体は滅びても魂はどこかで残っているのではないか、というようなことを匂わせるような、宮沢賢治の説明がございました。現象として生きていく、どんどん変化していく、でもどこかに変わらない要素を維持できるのです。

実はこの認識は、かつて宗教が支えていた安心、安全、救済のポイントでありました。魂は特別である、というのはまさにそうなのです。でも、もはや「魂」という表現では意味がなく、賢治はあえて「有機交流電燈の一つの青い照明である、これも現象であることを理解しなさい」と言い直しました。お互いに生きたものは死んだものとなり、他物を生かす力になる。一種の集合生命体であるという新しい発想です。

そこで第二の問題です。今お話ししたように、もし、生命あるいは生命体としての「自然」という現象に救済のチャンスがあるとしたら、古臭い言い方ですが生命に肉体とは別種の靈魂という流れを想定してもいいのではないかと。冒頭に、自然だけでは話が少し狭くなるのでふくらませて、「心霊」という語も加えました、とお話ししましたが、それはこの3人がいずれも靈魂の問題を考えていたからでした。ヘッケルは、靈魂は妄想であると否定しました。ただ、これはヘッケルのすごいところなのですが、われわれが意識や魂などと言っている形式では妄想なのだけれども、しかし、私たちがいろいろなものを感じたり、欲したり、悲しんだりする心理的な動きをもたらす情動には実体的なエネルギーがあり、彼はそれを「細胞の靈魂」と呼びました。すごい言葉です。細胞一つ一つの中に靈魂組織がある。

しかも、ヘッケルはその細胞靈魂が炭素系の物質でできていると、驚くべき確信を明らかに致します。つまり靈魂は物質なのです。1個1個の靈魂が細胞段階に入っていったら、その1個1個の細胞はたぶん無目的にいろいろな反応するのですが、それがだんだん組織化され、上のほうに向かうのに従って、一つの意識のようなものの源になっていく。ヘッケルは晩年に石英などの鉱物結晶体を「鉱物の細胞組織」と考えるようになり、その内部に存在する一部分を「靈魂」と認定します。その図鑑もあるのです。したがって、この段階で有機物と無機物は細胞内に靈魂物質をもつ存在としてつなが

りあうのです。

さすがに、ここまで話が飛ぶと、ヘッケルを支持する生物学者はいなくなりますが、彼はそれも覚悟の上で、発言しました。この段階で、ヘッケルは精密科学を離れ、救済の哲学に向かったといえましょう。ただし、注意すべき点もあるとおもうのです。ヘッケルはこの発見によって、鉱物に「心」があるとは言わなかった。「精神」があるとも言わなかった。マインドとは呼ばないのですね。実質を持った細胞の中にある炭素系の物質を、彼は「魂 Seele」と表現しました。ドイツ語では魂を seele と言います。でもこれは、昔の霊媒やイタコが言っていたような魂とはまったく違います。物質性を伴った心のことであり、それが細胞のどこかにあるかを調べることを、晩年の仕事にします。

これは熊楠の問題でもあるのです。熊楠は霊魂についてヘッケルとはまったく違い、霊魂があるかないか、不死や不滅の問題はそれを訊くほうが悪い、あるに決まっているし、不滅に決まっている、と言いました。事実、彼もいろいろな超常体験を味わっています。自分は亡霊を見たり人間の生死を感じたりするような、幽体離脱体験をすると書いてあります。

その一方で宮沢賢治は、霊魂についても独特な考えを持っていました。彼は、熊楠と同じように霊魂の存在には納得しております。彼はずっと、霊魂と交信する方法を考えようとしていました。なぜなら、自分が生きていく上で大切なものをどんどん失ってしまうことを補償するために、霊魂との交信に執着しましたから。つまり、霊魂との交信ができなければ、救済がなくなるということです。

もし救済があるとしたら、その前後にどこかで心霊世界との交信が可能になるはずだという信念が、彼の「安心」でした。それは具体的には、若くして亡くなった妹のトシさんとの霊的な通信であります。彼の文学作品は、大きく言ってしまえば、ほとんどが亡くなったトシさんの魂とどうやって出会うか、その方法を考える記録だったと言えます。もちろん、自分が死んで死の世界を潜ることも、賢治には想定できたと思います。しかし、賢治はこの世と彼岸との連絡が行われることを世界救済と考えましたから、足場をこの世に置こうとしたのです。そのことで、この世に生きる意味や幸福が奪回できると信じたのでしょう。

『銀河鉄道の夜』をはじめ、『春と修羅』は特にそうです。『春と修羅』に「永訣の朝」という詩があります。この詩を詳しくお話しする時間はありませんが、皆さん是非読んでください。亡くなろうとするトシさんが、一体どこへ行くのか見極めようという発想を持った詩であります。彼女が行く暗い空から雪が降ってくる、あんな薄ぐらい世界から、こんな真っ白な雪が降ってくる。そういう不思議な異空間に妹の魂が行こうとしています。その行き先である天から降ってくる雪が、霊的存在になる妹へ捧げる最後の食べ物という風に、賢治は感じます。そして雪をお椀に取り、まるで聖なる食事を出すように妹に捧げます。黄泉で食事をするを「よもつへぐい」と呼び、その食事を口にすれば汚れた死の世界に永遠にとどまらねばならないと言う信仰が、日本には古くからあります。でも、賢治の詩は、それとは全く違います。妹は清らかな天の食事を兄から捧げられ、おそらくそれによってこの世に戻ってこられるのでしょう。

ちょうど同じようなことを、江戸後期に平田篤胤という国学者も知覚しました。平田篤胤は国学の非常に重要な仕事をなしたにもかかわらず、発想が余りに飛んでいたため当時の学者から「奇男子」と呼ばれました。彼も、自分のためにずっと骨を折ってくれた織瀬という奥さんが亡くなったとき、あの世の妻に再会したいと熱望しました。黄泉に下り、「よもつへぐい」して汚れた存在になり、この世とは永遠に決別すると言う信仰が、どうしても受け入れられませんでした。そこで篤胤は死後の靈魂の行方を研究し、結論として、死者がいる世界はこの世と重なっており、死者のほうからはいつもこちらが見えていて、ときおり交流も可能となる、と述べました。『靈能真柱』にその一部始終が書かれています。まさにイザナギが亡くなったイザナミに会いたくて地獄まで下っていったのと同じ経緯であります。どこかで奥さんともう一度会いたい。そこで昔の文献を探し、死んだ奥さんに会ったとか、あの世に行って戻ってきたとか、仙人の世界で暮らしたとかいう人を江戸中、日本中に探して会いに行きます。

そして、確信を得るのです……奥さんがずっと大切にしていた琴がある晩、音を出した。それをよく聞いてみると、奥さんがよく弾いていた曲であった。奥さんの霊は自分の側にいるのだ。いつも自分を見守ってくれている、と。

黄泉の国のようなところへ行って、どろどろに溶けて、ゴミと同じような状態になっているのではまったくなく、ところは違えど、われわれと同じ空間に住んでいて、ただ位相が違う異空間である「幽冥界」におり、明るい世界と暗い世界に分かれているだけである。交通しようと思えばできるのだと考えました。これが後に「守護霊」という言い方になった安心の哲学です。平田篤胤は確信を持ってそれを主張し、この世の中では霊界と現世がくっ付いているという新しい展開を明らかにして「安心」を得るようになりました。このおかげで、平田学派は一つの新しい救済を得たと言えます。

たぶん宮沢賢治も、この世のみんなが救済される一つの大きな構造として、物理的宇宙と心霊的宇宙の交差する自然界を創造したかったと思います。生と死をつなぐ架け橋のような存在として、ときには通信ができる世界がありうることを、何とか立証したかったのです。『春と修羅』にはそういう話がいくらかでも出てきます。彼は列車に乗って、樺太に行きます。樺太に行く列車の中、亡くなった妹から通信が途絶えたので、それを待っている詩があります。有名な『銀河鉄道の夜』もそうだと思います。

昔だったらそれは霊媒か何かに呼ばれる魂があったのでしょけれども、宮沢賢治はそういう表現法は考えませんでした。極端な話、鉄道に乗れば、もしかしたら異世界へ行けるのではないかと彼は考えていました。

じつは唯物論に凝り固まったかのように見えるヘッケルも、奥さんを亡くした時に篤胤と同じような「絶望を乗り越える思想」を体現しています。彼も新婚 18 ヶ月目くらいでアンナという奥さんを亡くしました。そのあとは悲しみのあまり自暴自棄となり、ダーウィンの進化論に反対する人々に論争を吹っかけ論破することにしか生きがいを見いだせない人間になってしまいました。しかし、ある

日、南フランスの海岸でまだ未記載種のきわめて美しいクラゲを発見します。そのクラゲの長い触手が、まるで亡くなった妻の髪のように見えたので、ハッと思いつくのです。妻は人間としては電燈が消えるように亡くなったけれども、彼女の「明かり」だけは、実体だけが違う次の生命の中に乗り移って、その生命の中で存在し続けている。妻の魂は生命の流れの中で別のかたちとなって今出現しているのだ、と。それがこの「美しい髪の毛のような触手をもつクラゲ」なのでした。彼はそのクラゲを記載するときに「アンナ・ゼーテ」という奥さんの名を学名として付けました。最後にもう 1 つ、ヘッケルがいかん魂を生命の救済に活用したかという証拠をお見せします。先ほど、靈魂が物質としてみんなの細胞の中に具有されている、それを探したというお話をしました。彼は死ぬ直前にそれを図示しています。

靈魂物質、見てください。これです。鉱物の中に靈魂の結晶体を見つけました。顕微鏡を駆使して見つけた、鉱物の中の結晶体です。結晶こそあらゆる物質の中、あらゆる細胞の中に存在している靈魂の姿である信じ、このような図を描きました。亡くなった奥さんの例も、鉱物にまで浸透していると考えたとき、ヘッケルはこの世に生きて研究を続ける意味を見いだしました。

彼の最後の論文は、靈魂の結晶体を見つけたことで終わっています。これも、彼にとっては大変な安心だったのだと思います。この世の中には、今まで言われてきた靈魂や心というものは霊媒にしか用がないものであったかもしれないが、われわれを支える魂の感覚的な源はちゃんとした物質にある。つまり、この世の中に実体として存在する。これでヘッケルは最後の救済と安心を得ました。

極端な 3 人でありましたが、こうした人々が危機の時代に、ときを同じくして自然観、生命観を改革しようとしたお話でありました。熊楠の存在の価値を知る上で、私は有意義な比較対照ではないかと考えており、こうしてみなさまにご披露した次第です。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

最初に補足をさせてください。私は先ほど熊楠との比較をするために宮沢賢治とエルンスト・ヘッケルというほぼ同時代人といつてよい 3 人の人物を取り上げました。そこで共通していることは、もっとも強烈な危機として 3 人が非常に身近な人を亡くしている事実です。それが学問のヒントにつながったヘッケルの場合もありますし、本当にあの世と通信を結ぼうとして文学と農政学に取り組んだ宮沢賢治のようなケースもあります。

では熊楠はどうかというと、話し足りなかった部分をあとから考えてみたのですが、熊楠もいろいろと重要な人に死に別れているのです。特に若いときですね。一番重要なのは、たぶん二人の幼友達、故郷和歌山で羽山繁太郎と蕃次郎兄弟との死別だったのではないのでしょうか。熊楠は羽山家でどちらもイケメンの兄弟に「ボーイズラブ」を感じました。それが彼を同性愛の研究に向かわせました。熊楠が外国に出発するので兄弟と別れてから、その恋情は大きくなりますが、実は兄弟は熊楠が日本を出ている間に相次いで亡くなってしまいます。親友 2 人の死は、彼にとっては非常に大きな危機問題

となったはずで、その克服が熊楠の半生を支配したテーマの一つだったと思います。熊楠は同性愛のもっとも清らかな姿として肉体関係ではない魂の無垢な合体関係を、このボーイズラブに見ています。

ひょっとしたら、熊楠が住んでいた故郷とのつながり自体を象徴する交流だったかもしれないので、そのシンボルが小さいうちに亡くなってしまったことが、彼にとって和歌山の自然との関係の中で、死という問題をどう乗り越えるかというテーマに発展した可能性はあると思います。熊楠は、破壊されていく和歌山の森に、羽山兄弟の死を重ねあわせていたのでは、と思う所以であります。

また、はっきり分らないのですが、熊楠は妹の藤枝さんも亡くしています。熊楠と仲のよかった妹さんは、もしかしたら宮沢賢治と妹のトシさんと同じような、兄妹だけれども同志のような関係があったかもしれません。いずれにしても、偶然ですが若いうちに奥さんを亡くし、妹を亡くし、親友を亡くしたという、この3人の危機体験は、たまたま神も自然も死に絶えそうになった時代の危機思想と結び付いた可能性があるのではないかと、あらためて深く考えるようになりました。

それに関連して、いろいろな質問をいただいたのですが、テーマを二つに集約できると思いますので、まとめてお答えさせていただきます。

一つは、3.11 大震災のような危機が起こり、家族があつという間に亡くなってしまったときに、博物学をはじめ科学に、一体何ができるのか、という問題です。基本的に震災が起こった後に、世界や自然を探究する認識方法は改革されます。ここでは、この世から奪われた生命が果たしてどこへ行くのか、その行き場所について新たな見解が明示されるということです。ヘッケルと熊楠のときにお話ししたように、生命体は完全に破壊されればどうなるか分かりませんが、とにかく一部が残っていることが大変重要なことです。その残った一部をどう復活させるか。私は、失われた生命がそういう災害の犠牲ではなく、むしろ災害への防波堤であったという生命観が出てくることを期待します。同時に、その防災の基本は、失われたものを物質的にも心霊的にも補うことができる生命体への信頼にあるといえるでしょう。

今お話ししたように、宮沢賢治にしても農政学を得意としたから、あれだけ災害のある場所で、農業をはじめとするああいうものをどう復興させるかということを、常に考えていたはずで、賢治の文学作品は、その意味でも読み直しの価値があるのではないかと考えております。

また、自然と対峙する方法や手段が、しばしば大きな政治の力によって、自然を生かすという方向でなく二度と災害が起こさせない方向にむけられているように思います。それに対して、生物学的なアプローチができるのではないかと私は思います。つまり、「死という防波堤」の力です。この防波堤は災害を受けて死にますが、ふたたび蘇る。

東北のほうで例えばその一つが、高さ十数メートルの大防波堤をつくる計画です。今まで、大規模な防波堤は、だいたいだめなのです。では、ほかの方法はないのかということで、東北でもいくつかの手法が考えられています。その一例が、生きた植物による防波堤造りです。そういうときのための知恵は出せるのではないかと。熊楠研究の一分野ではないかと思ひます。

古いものは1回なくなると、それこそ取り返しのつかないことになります。これをキープすることは、古いことにかかわり合っている人たちの新しいライフワークになるのではないか。特に祭りや儀式は、1回なくなるとどうしようもなくなります。生き物もさることながら、人間がつくり出している第二自然のようなものも含めた復活は、おそらく、もっとも意識せねばならない課題でしょう。

私も岩手でコメントを求められたことがあります。死や破壊をどうやって「前向きに」諦めるかがとても重要ではないかと思うのです。人間はいろいろな欲望などによって諦めることができません。諦めとは後ろ向きのように感じるのですが、よく考えてみると開き直りではないかと思うのです。諦めの方法は、今までは鎮魂祭などで慰霊碑をつくるという形で何となく折り合いをつけていたところがあったと思います。諦めは、仏教用語にもあります。熊楠などが何か言っていそうな感じがするので、調べてみたいと思います。

それに関連して、賢治や熊楠やヘッケルがいたときに、実はヨーロッパで心靈主義というものが起こりました。科学ももちろん進歩しましたが、アンチテーゼとして心靈の実在をめぐる大きな議論になりました。おそらくヘッケルには、この人たちの影響があったと思います。もちろん、宮沢賢治も関心を抱いた新思潮でした。ただ、ヘッケルは心靈にまつわる言説のほとんどが虚報であって、そういうものに携わってしてしまうと、われわれの新しい知識にならないと言って、特に霊媒の問題、心靈的な交流は徹底的に批判しました。そうではなく、お話のときにも出しました通り、形になるものや物質的な根拠のあるもの、つまり、物質的基礎を体系に置いたような靈魂観を、もう一度考えるべきだ、と主張したように思えます。今まで通り祈祷をするなど、そういう形での独りよがりな、気分を収めるだけの心靈研究は時間の無駄であると彼が言っていましたが、そのわりに心靈については、形をかえて、奥さんの話のような、ああいう形で自分自身に跳ね返ってきたわけです。

宮沢賢治については、たぶんスピリチュアリティの影響が多分にあると思います。彼も熊楠と同じでドイツ語を学び、外国の文献をいろいろ読んでいましたので、日本でもかなり古くから、神智学やそのような新しい心靈文化、美を超越した千里眼の世界のことについても新しい実験が行われていることを含め、そういう知識をおそらくたくさん知っていたはずです。

ただ、彼の場合にもやはり新しさがキーワードです。それはどういう新しさかと言えば、一つの方法論として、妹との心靈的交流をこころみる実験精神です。まず、本人が今まで考えられてきた人間観を破棄しています。自分は電気系のランプのような存在であり一種の集合体だという、集合無意識を思わせるつながりを生命の本質とする点では、当時の心靈主義に負う部分も感じられてきますね。

熊楠の場合は、たぶん皆さんのご意見にもあった通り、彼もいい加減な救済が嫌いだったと思うのです。そういう意味では、ただ単に慰められるだけで心靈の本質を明示しようとしめない心靈主義は、そんなに単純には受け入れられなかっただろうと思います。心靈的なものが必要であること、実在することについては、確たる確信を持っていたにしてもですね。

補足すべきお話しは以上です。ありがとうございました。